Vol.20

比較文化学科通信

発　行　関東学院大学文学部比較文化学科　〒236-8502 横浜市金沢区釜利谷南3-22-1 TEL.045(786)7179

巻頭言　新たなる開国へ ― 国際文化学部という希望 ―

比較文化学科長　伊東 光浩

来春、文学部は名称変更して国際文化学部に生まれ変わります。秋にこの文章を読むことになる最後の文学部生の皆さん（2014年度以前入学の学生）が一人もいなくなったとき、文学部はその歴史を閉じます。私たち比較文化学科は、新生英語文化学科と共に、国際文化学部所属の一学科として、名称を変更することなく存続することになりました。

国際文化学部開設の2015年は戦後70年目の節目の年でもあります。1945年８月15日、日本は先の大戦に名実ともに無条件降伏しました。さらにさかのぼること明治改元70年後の1938年、日本はその大戦に参戦（1941年）すべく突き進んでいました。多くの知識人が維新以来の「開化日本」における「近代」への違和感を、そして、その「近代」に対する世界史的「超克」を雄弁に語り、一億国民は「一つの世界（大東亜）」という野蛮を夢みていたのです。

戦後69年、日本人は大戦の大義として戴いたその「超克」の発想そのものが（それが対象とした）「近代」と共有する（ところの）後進性に、ようやく気づきつつあるように思います。

「超克」を語るべき豊饒に70年、そして、その発想自体の共犯生、後進性への覚醒にやはり70年を要したということになります。豊饒から覚醒へ、それは日本人が辿った成長への必然的迂路だったのだともいえます。

契機となったのはいうまでもなく、開国と敗戦です。その間、日本人が最も切実に関わり続けたのが modern Europe、とりわけ modern Anglo-Saxon という他者だったのであり、私たちは「超克」を企てた当の「近代」が持つ後進性を、自らが演じた帝国的野蛮への追恨を契機に、都合150年の迂路を経て今ようやく了解しようとしている、というのが私の見方です。「了解」を促してくれたのはアジアの友人たちの「声」でした。

その充溢を礎に、日本は今、自律的成熟国家として、地球規模の開国を〈開始〉しつつあるように思われます。人類はいまだに野蛮の後進性、そのあくなき連鎖を演じ続けています。日本にとっての今日的課題とは、「超克」の野蛮が収斂する〈悲惨〉を、ヒロシマ・ナガサキと重ね合わせつつ、解明されるべき人間性の根源を根拠とする「共に生きる世界」という人類の近未来的帰趨に向けて、知的かつ品格溢れる実践的提言を国際社会に誠実に発信していくことに他なりません。新設される国際文化学部の希望もそこにあります。

「近代」イデオロギーを色濃く憑依させた「文学部」という system は、「近代」に対する上記後進性の了解を承けて、やがて「終焉」していくだろうと私は見ています。

維新150年の2018年、新学部は完成年度を迎える予定です。　　９月10日記

卒論中間発表会に向けて

本学科教員　岡田　桂

本年度の卒論中間発表会の日程が、10月25日㈯に決まりました。卒業論文は、大学での学びの集大成です。これまで受けてきた講義の内容や、ゼミナールを通じて培ってきた興味をすべて注ぎ込む！という意気込みで執筆をすすめて下さい。４年生にとって中間発表は、孤独な道程となりがちな卒論作成のなかで、自分のテーマについてゼミ以外の学生から意見をもらえる貴重な機会です。毎年、「中間発表で得られたアドバイスのおかげで、卒論の内容がより良いものになった」と語る学生が多数います。また、中間発表会には、卒論執筆予定の３年生も必ず参加しなければなりません。ぜひとも、今後一年で自分が書き進めてゆくことになる「卒業論文」というもののイメージを、先輩が行う中間発表の内容や雰囲気からつかみ取って下さい。卒論作成は、確かに辛く厳しい部分もありますが、それを乗り越えたみなさんは、必ず「自分の学びを形に残した」という代えがたい充実感を得られることでしょう。

ワールドスタディ

ソウル報告「日本と朝鮮半島の関係を４つの視点で学ぶ」

今回のワールドスタディ・ソウルは　８月30日～９月４日の５泊６日の日程で、２年生４名（男子１名・女子３名）、４年生１名（男子）と高麗大学の交換留学（10か月間）から６月に帰国したゼミ生（３年生）がアシスタントとして参加しました。

現地研修では、①朝鮮王朝の歴史を学ぶ　②日本の朝鮮植民地支配と独立運動を学ぶ　③南北分断の歴史と現在を学ぶ　④領土問題を学ぶ、という４つのテーマを設けました。

①では朝鮮王朝５大王宮を見学し豊臣秀吉の朝鮮侵略の跡に思いを馳せ、②では「西大門刑務所歴史博物館」で苛酷な植民地支配の一端に触れ、「安重根義士記念館」では丁度、生誕135周年の記念日にあたりました。③では「戦争記念館」で朝鮮戦争の韓国国軍と「国連軍」の戦いを学び、分断の最前線である軍事境界線「板門店」を訪れ、韓国国軍兵士・「国連軍」の米軍兵士と北朝鮮人民軍兵士の対峙を直接、目の当たりにし、④では「独島体験館」を訪れ、独島＝竹島問題の歴史と現状を学びました。

学習だけの研修ではなく、今回は高麗大学との交換留学の第１期生（2006年）の一人であり、現在、高麗大学大学院博士課程で日韓比較文学を専攻している金東僖さんが同行してくれたおかげで、ソウル市民が憩う路地裏の店での食事を楽しむこともできました。　（担当教員：大内憲昭）

以下は、参加した学生の感想・印象です。

◆

今回、韓国は行きたかった国だったのでとても嬉しかったです。また数々の王宮や博物館を巡り、過去を知ることで改めて歴史を勉強し直そうと思いました。また軍事境界線を見学して、見えない壁を挟んで両国の兵士が隣り合わせで立っているのを見たときは、日本にはない独特の光景でした。　（４年　島村忠宏）

◆

特に印象的だったのは「西大門刑務所歴史博物館」である。当時使っていた死刑台に、地下拷問室、独房など想像していたものよりずっと辛かった。韓国を訪れても行けない場所にたくさん訪れることができ、自分の目で見て学べたのは良かったと思う。　（２年　長谷川由美）

◆

私にとってこのワールドスタディが初めての海外だった。最初は、期待や不安が入り混じっていたが、日を追うごとに楽しさが増していった。今回は５大宮殿をすべて巡ったり、板門店に行き軍事境界線に立つなど、ワールドスタディでしか学ぶことができないものをたくさん学べた。特に板門店を訪れた時は衝撃的なことばかりで、とても感動した。そのことにより、韓国の歴史に興味を持つようになった。今回のワールドスタディで学んだことを生かしながら、秋学期からのゼミや授業に臨みたいと考えている。

（２年　三澤美紗子）

景福宮等の宮殿、戦争記念館などの博物館を訪れたが、日本が韓国に対して行った悲惨な出来事を詳細に想像でき、悲痛に感じた。今まで、韓国の文化に興味を持ち、授業で何度も調査や研究を重ねたが、歴史には深く着目していなかった。今回、現地で歴史や韓国側の主張を明確に知り衝撃を受けた。何故、日韓関係に関する情報が頻繁に報道されるのか、大問題に発展したのか理解した。６日間の滞在で、一般観光にはない経験をし、多くの知識を身につけ、語学力も僅かながら向上したと思う。大変貴重な体験だった。　（２年　廣田　遥）

今回、韓国は初めてだった。政治、歴史認識、従軍慰安婦、領土（独島＝竹島）問題等が山積している今日の日韓関係のため、日本人は嫌な目で見られるのではないかと思っていた。しかし、そんなことはなく、とても優しい方ばかりで今までの韓国に対する負のイメージがなくなった。

（２年　鈴木良季）

景福宮

板門店

西大門刑務所歴史博物館

宗廟

戦争記念館

朝鮮戦争で破壊された鉄橋の橋脚と南から北への新線

韓国映画で知られる「JSA」

少女の像（日本大使館向かい側）

安重根義士記念館（生誕135周年の日に）

「横浜」に根ざした比較文化

関東学院大学×横浜ウォーカー共催「横浜と英国」シンポジウムを終えて

夏の初めの６月22日に、比較文化学科ゆかりの小林照夫先生、君塚直隆先生、岡田桂先生の３名を講師として、「横浜と英国」と題したシンポジウムが関内メディアセンターで行われました。地域情報誌「横浜ウォーカー」と関東学院のコラボとして７回目になる今回は、130人の聴衆を前に、横浜と英国との深くて長い結びつきを三者が様々な角度から解説しました。

港湾研究の第一人者である小林先生は、開国初期の横浜で“港都横浜のプランナー”として活躍したイギリス人、ブラントンとパーマーについて講演。当時、まだまだ近代化の途上にあった日本は、先進国イギリスから多くの技術者を招きましたが、中でも港湾の重要な機能である灯台の設置に尽力したブラントンと、船が直接接岸できる埠頭を整備したパーマーの功績は大きく、「横浜の建設はブラントンに始まりパーマーで完成した」と評されました。

岡田先生は、横浜を通じて流入した英国発祥の文化であるスポーツと、英国に渡った柔術について解説。明治初期、横浜居留地に住む英国人たちは自らスポーツを楽しむため、様々なクラブや競技施設を整備し、それが現在も残る横浜の公園や運動施設の元となりました。一方、同じ時期に英国へ渡った日本の柔術は、やがてイギリス社会に「Jiu-jitsu」ブームを巻き起こすまでになりました。横浜は、スポーツを通じて日英文化交流の最初期を担ったということができます。

英国王室の専門家としてメディアでもご活躍の君塚先生は、1869年横浜港に到着し、近代日本がはじめて国賓として迎えたヴィクトリア女王の次男・アルフレッド王子をはじめ、その後に来日したジョージ五世、エリザベス二世が保土ケ谷の英連邦戦死者墓地を訪れた事実などを通じて、英国王室と横浜との長い繋がりを解説。まだ近代国家としての外交儀礼を整備していなかった明治政府の困惑や、ジョージ王子（のちの五世）が意外にも日本のお米を「おいしい」と評したことなど、興味深いエピソードが語られました。

横浜に根付いた関東学院が、その横浜と英国をつなぐ文化理解の橋渡しをする、そんな有意義なシンポジウムになったと感じます。

国際文化カフェ

また、いっしょにやろう

―――――――― 本学科教員　井上 和人

８月２日（土）と24日（日）のオープンキャンパスに、「国際文化カフェ」を出店しました。「お茶を出して、おしゃべりしただけでしょう」といわれれば、そうかも……。ですが、（声を大にしていいます）英語英米文学科と比較文化学科、共同で出店したところが大事なのです！　同じ釜利谷キャンパスにいながら、いっしょに何かをするという機会、本当にありませんでした。来年度からは二つの学科で一つの学部になります。このままではまずいでしょう。そこで、新学部のＰＲもあって、「国際文化カフェ」の企画となった次第。スタッフ諸君もはじめは互いによそよそしくて、「大丈夫か？」と思わなくもありませんでしたが、そんなのはただの杞憂。手探りで始めたカフェ、盛況のうちに終えることができたのは、スタッフ諸君のおかげです。これをきっかけに「また、いっしょに何かやろう」という雰囲気が高まればいうことなし。どうもありがとう！！

来年も再来年もその先も

―――――――― 比較文化学科３年　宮内 拓己

今回が記念すべき第１回目である国際文化カフェに参加させていただきましたが、気軽に立ち寄ってもらってお茶をしながら在学生とお話をするというこの企画、自分としてはとても良いものだったと思います。というのも、ガチガチの大真面目な場ではできないような話までできてしまうゆるい雰囲気が、恐らく緊張していたと思われる高校生には、とても安心できたのではないかと思ったからです。それにより、気になっていたことをちゃんと質問することができたという高校生の方も、少なくないのではないでしょうか。このような場がなければ、高校生の方が本当に気になっていることを聞ける機会というものはないと思いますので、ぜひ来年も再来年もその先も国際文化カフェを企画していただければと思いました。ただ、飲み物を仕入れる量はもっと減らしても良いかもしれないですね（笑）

就職支援センターを利用しましょう！

本学科教員　碓井 みちこ

１・２年生にはまだなじみがないかもしれませんが、大学には、「就職支援センター」という、皆さんの就職活動をサポートする場所があります。サポートの内容としては、①企業研究の視点、自分自身の適性、情報収集の方法を学ぶための「各種講座」の開催、②「インターンシップ」（大学の正規の授業科目として認定）の実施。単位認定されないインターンシップについても応募等の相談に対応③「学内企業説明会」（本学の学生を採用する意向のある企業の方々が多数来られる説明会）の開催、④「学生の個人相談」の実施、などが挙げられます。この就職支援センターは、金沢文庫キャンパスでは厚生棟の２階（購買部の上階）にあり、比較文化学科の学生は主にこちらを利用しています。ちなみに金沢八景キャンパスのほうは、フォーサイト21の１階にあり、ここも本学の学生であれば誰でも利用できます。

３年生の皆さん、秋学期は、この就職支援センターの用意する各種講座が本格始動します。出来るだけすべての講座に参加して下さい。なかでも「就活チャレンジ講座」は、就職支援センターが最も力を入れているもののひとつで、「自己分析」や「企業研究」の観点を養うものです。申込を強くお勧めします。就活へのモチベーションをこれらの講座で高めてほしいと思います。またそれと併行して、個人相談も、是非早いうちに利用を始めて下さい。「仕事」や「働くこと」をどう考えるのか、自分の中でまだ漠然とした状態であっても、気軽に相談に訪れて構いません。そして、４年生の就活中の皆さん。これまで先輩たちも秋学期に内定を得たケースは多々ありました。昨年度よりも求人数は増加しており、活動を続けることで、チャンスは広がります。学内企業説明会は秋学期も開催されますし、個人相談も是非活用してほしいと思います。

昨年度と今年度、私は、文学部の就職支援委員を担当しており、それもあって、就職支援センターの利用を折に触れて学生の皆さんに呼び掛けてきました。各種講座への出席など、皆さんの間でセンターの存在はだいぶ浸透しているようですが、就活が本格化すると、センターに頻繁に相談に来る学生とほとんど来ない学生とで二極化しているように見受けられます。それは非常にもったいないので、もっともっと多くの学生にここを有効に活用してほしいと思っています。

著書紹介　『川端康成　魔界の文学』について

本学科教員　富岡 幸一郎

本年の５月に『川端康成　魔界の文学』（岩波書店）という本を出しました。川端康成は、昭和43年に日本で最初のノーベル文学賞を受賞した作家です。『伊豆の踊子』や『雪国』といった作品は、皆さんも名前は知っていると思います。読んだ方も多くあるでしょう。『伊豆の踊子』は、青春小説・恋愛小説としても読めますが、その流れるような文章の美しさは素晴らしいものがあります。また、『雪国』は「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」という書き出しが有名です。

川端康成は作家としてのデビューの頃、新感覚派と呼ばれる文学グループに属していました。大正時代に西洋から入ってきたモダニズムや様々な芸術作品（シュールレアリスムの絵画や映画という新しい表現）の影響を受け、斬新でポップな日本語の小説を書いたのです。『雪国』はいかにも日本的な伝統美の世界のように思われがちですが、実際に読んでみるとその文章はとても斬新で驚くような表現が随所に出てきます。また、いわゆる行間を読ませるという独特な文体でもあります。

今回の本では、川端の代表作を取り上げましたが、昭和30年に刊行された『みづうみ』という作品に多くの発見がありました。作家川端が生涯をかけて探求したものとは何であったのか。世界的な文学者の作品と軌跡を追ってみました。

比較文化学科通信 Vol.20　　2014年10月1日発行
編　集：関東学院大学文学部比較文化学科
編集協力：関東学院大学文学部比較文化学科ゼミナール連合会
〒236-8502 横浜市金沢区釜利谷3-22-1　TEL:045(786)7179　URL:http://www.univ.kanto-gakuin.ac.jp
印刷所：株式会社なまためプリント　〒231-0006 横浜市中区南仲通4-43馬車道大津ビル　TEL:045(641)8080